

## パブリック・アクセス・テレビとアメリカのシニア市民たち ーサンフランシスコ市および近隣コミュニティでの調査からー

ここでは、2002年1月に「シニア市民とメディア・リテラシー研究プロジェクト（代表：鈴木みどり立命館大学教授）」がアメリカ・サンフランシスコ市周辺でおこなった訪問調査の報告をおこないます。

なお内容は、以下の報告書をもとに構成等を一部変更したものです。

『インターネットサイト「シニア市民とメディア・リテラシー」の構築に向けて』、文部科学省科研費研究「京都市における高齢者福祉情報システムの開発研究（1999－2001年度）」[研究代表者：中川 勝雄立命館大学教授]のうち「シニア市民とメディア・リテラシー研究プロジェクト（代表：鈴木みどり立命館大学教授）」による共同執筆、2002年

### - 目次 -

1. 調査の概要
  - (1) 調査の目的
  - (2) 調査の計画と実施
2. 生き方を表現するシニア市民たち
  - (1) クパティノー・コミュニティ・テレビ
  - (2) サンタクルーズ・コミュニティ・テレビを拠点に
  - (3) 街のマルチメディアな研究者：リチャード・リボウ
3. コミュニティとの相互作用
  - (1) ミッドペニンスラ・コミュニティ・メディア・センター
  - (2) ペタルーマ・コミュニティ・アクセステレビ／メディア・センター
4. パブリック・アクセス・テレビ局／コミュニティ・メディア・センターに共通するもの
  - (1) ミッション・ステートメントにみる理念
  - (2) 多様性
5. エグゼクティブ・ディレクターの果たす役割
  - (1) サンタロサ・コミュニティ・メディア・センター
  - (2) アクセス・サンフランシスコ
6. おわりに

## 1. 調査の概要

アメリカ合衆国におけるパブリック・アクセス・テレビ局／コミュニティ・メディア・センターは、1970年代より映像時代に発言を求める市民の発言する権利を保障するシステムとして社会的に機能し始めている。このシステムにおいては、ケーブル・テレビ（CATV）会社と地方自治体が契約する「フランチャイズ（営業権）」という制度、および、アメリカ建国以来の伝統である草の根の民主主義によるコミュニティの存在が重要となっている。コミュニティを支える市民および地方自治体とCATV会社の交渉によって、教育セクター（E）、地方自治体（G）、市民（P）が自由に使えるチャンネルが確保されており、それらのチャンネルを運営し、市民のチャンネル使用や番組制作を可能にするための研修ワークショップやスタジオ・機材を提供するNPOがCATV会社からコミュニティへ支払われるフランチャイズ料で設立され運営されている。

鈴木はパブリック・アクセス・テレビ活動を1990年代初頭に日本に紹介したが<sup>1</sup>、その後、パブリック・アクセス活動に関する研究としては、津田・平塚によるアメリカのパブリック・アクセス・チャンネルやそれを運営するNPOや制度と、日本のCATVを活用した市民の取り組みについての調査報告<sup>2</sup>、ヨーロッパ4ヶ国の調査報告<sup>3</sup>がある。また、宮崎・児島は、日本のCATVを活用した市民のドラマ制作に関する事例研究とオランダのパブリック・アクセスを比較した研究を行っている<sup>4</sup>。

しかし、本調査のようにパブリック・アクセス・テレビ活動に参加するアメリカのシニア市民に焦点をあてて具体的事例を調査する研究は、これまでなされてこなかった。

本報告は、「シニア市民とメディア・リテラシー研究プロジェクト（代表：鈴木みどり立命館大学教授）」が2002年1月14日から20日にかけて実施した訪問調査の分析に基づいている。

### （1）調査の目的

- ・ 高齢社会／メディア社会を生きるシニア市民がメディア、なかでもテレビという映像メディアに関わって能動的に社会に参加する具体的な事例をアメリカのパブリック・アクセス活動に探る。
- ・ そして、シニア市民が能動的／主体的に参加するためにはどのような社会的システムが必要になるか。シニア市民の番組制作を支えるパブリック・アクセス・テレビ／コミュニティ・メディア・センターを訪ね、行動するシニア市民、彼らを支える市民たちと交流するなかで考える。
- ・ シニア市民によるパブリック・アクセス・テレビ活動をどのようにメディア・リテラシ

---

<sup>1</sup> 詳細は、鈴木みどり「アメリカのパブリック・アクセス・テレビ」、鈴木みどり編『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』、世界思想社1997年、pp200-231。

<sup>2</sup> 津田正夫・平塚千尋編『パブリック・アクセス—市民が作るメディア』、リベルタ出版、1998年。

<sup>3</sup> 市民とメディア調査団（ヨーロッパ）『ヨーロッパの市民とメディア—オランダ、イギリス、フランス、ドイツの事例から』、2002年。

<sup>4</sup> 児島和人・宮崎寿子編『表現する市民たち—地域からの映像発信』、NHK出版、1998年。

一の取り組みの一環に位置付けることができるか。本調査では、パブリック・アクセス・テレビ活動に参加するシニア市民、彼らをサポートする市民たちと対話をもつなかでそのような課題を考える。

## (2) 調査の計画と実施

### ●調査訪問先

サンフランシスコ市を中心に、車で移動可能な半径 100 マイルの地域にあるパブリック・アクセス・テレビ局 9 ケ所を調査訪問した。いずれの局もコミュニティ・メディア・センターと一体化している。訪問先の決定はインターネットサイトを通して行い、①シニア市民が制作する番組を放送している局を選んで調査の主旨を説明する手紙を添付して e-mail を書き、②返事がきた順に決定していった。実際、welcome mail が次々と返ってきて、訪問先は数日で決まってしまった。サンフランシスコ市周辺都市を調査対象に選んだのは、この地域がアメリカの映像メディア活動の拠点となっており、市民の活動が盛んであること、さらに、鈴木がこの地域にあるスタンフォード大学で留学生として学んだ経験をもつことから友人、知人が多く、状況を詳しく把握しやすいことによる。

### ●調査対象者と調査方法

それぞれの訪問先では、各局／各センターの運営で中心的な役割を担っているエグゼクティブ・ディレクター／アシスタント・ディレクターと、番組の制作に参加しているシニア市民（シニア・プロデューサー）への聞き取り調査を行った。また、訪問先によっては、シニア市民たちによる番組制作の実際を観察する機会をもつこともできた。調査は録音に加えてビデオカメラによって撮影し、デジタルカメラによる調査データの記録も行った。さらに、シニア市民から制作した作品の提供を受けたり、帰国後、エグゼクティブ・ディレクターを通してシニア市民による作品を送っていただいたりして、2002 年 3 月末現在、計 5 本の作品を入手している。

### ●調査参加者

鈴木みどり（産業社会学部教授）、西村寿子（社会学研究科博士後期課程）、野口由紀（同博士前期課程）

### ●調査期間

2002 年 1 月 14 日-1 月 20 日

### ●現地コーディネーター

メディア学を専門とする元大学教授ジョージ・コンクリン（George Conklin）氏が自ら運転して調査訪問先へ同行した。短期間で 9 ケ所もの訪問調査は、車での移動抜きには不可能であった。コンクリン氏はご自身もシニア市民であり、1970 年代のアメリカで始まった Television Awareness Training=TAT の創始者の一人である。鈴木とは 20 年来の親交があり、今回の調査の主旨を理解し協力していただいた。

## 2. 生き方を表現するシニア市民たち

### (1) クパティーノ・コミュニティ・テレビ

今回の訪問調査では、パブリック・アクセス・テレビ局／コミュニティ・メディア・センターを活用して番組を制作するシニア市民に出会い、その参加形態の多様性を知ることができた。なかでも、クパティーノ・コミュニティ・テレビ(Cupertino Community Television)では、シニア・プロダクションというグループをつくって *The Better Part* という番組(週1回放送)を制作するシニア市民たちに出会った。いきいきと活動する彼らと出会うことで、高齢社会／メディア社会をどう生きるかを考えるうえで多くの示唆を与えられた。まさに、今回の調査のハイライトといっても過言ではないだろう。以下に、この「クパティーノ・シニア・プロダクション」について報告する。

#### ●高齢社会／メディア社会をいきいきと



クパティーノ市はサンフランシスコ市から南 25 マイルほどの郊外に広がる人口約 52000 人の都市で、シリコンヴァレーの一角にある。この郊外都市の中心に位置するディ・アンザ・カレッジ構内にクパティーノ・コミュニティ・テレビがある。カレッジから歩いて1、2分のところにシニア・センターがあるが、このセンターは目を見張るほどリッチな木造建築である。シニア・センター正面の道路をわたるとすぐにカ

レッジの構内に入る。カレッジの入り口にある建物の階段を降りると狭い出入口がある。ドアを開けて通路を歩いていくとスタジオとコントロール・ルームがあった。

ちょうどスタジオでは、10人近いシニア市民たちが番組 (*The Better Part*) の収録をしていた。見たところ 70 歳以上の方も含まれている。番組は、コミュニティでボランティアとしてバスの運転をしているシニア市民をゲストに招いたトーク・ショーだった。スタジオでは、司会役の女性とゲストの男性が向かい合って座っている。3台のカメラを操作する中には女性もいる。シニア市民のフロア・マネージャーの合図で秒読みが始まる。制作に加わっている10数名のシニア市民の表情は真剣そのものである。この日は、何回もやり直してようやく OK が出ていた。



#### ●エネルギーあふれるシニア・プロダクション

シニア市民のカール・マッキャン(Carl McCann)さん、ヴァレリー・ジェフェリー(Valerie Jeffery)さんに聞き取りを行う。カール・マッキャンさんは、引退した大企業のエンジニアで日本に何回もビジネスで来たという。モーガンヒルのコミュニティ・テレビ MHATでも活動をしている彼は、見事な口ひげがとてもおしゃれな男性で、落ち着いた話し方をする。ヴァレリー・ジェフェリーさんはイギリス出身の女性だ。

シニア・プロダクションは、シニア・センターに集まったシニア市民たちによってできたグループである。シニア・センターの施設の豪華さからこの地域がとても経済力のある地域であることが推察できる。シニア・センターは一定の会費を払えば誰でも利用できるのも、クパティーノだけではなく、周辺都市からシニア市民が集まってきている。



マッキャンさんによると、「クパティーノ・シニア・プロダクション」は50歳以上の22人が参加している。この地域には引退したエンジニアが多く住んでおり、シニア・プロダクションにもカール・マッキャンさんの他にも参加している元エンジニアがいる。番組制作をする技術はお互いに学びあうとマッキャンさんは語っていたが、それを可能にするキャリアを持つ人びとが参加している

のだろう。

「番組制作の際にスクリプトを書くが、書き方を教えてもらうのか」と尋ねると、ヴァレリー・ジェフェリーさんが笑いながら「私たちは、仕事で企画書を書いてきたのだから、スクリプトの書き方を習う必要はない」と答えてくれる。

彼らの話を聞きながら、シニア市民が仕事や生活を通して獲得してきた知恵と力を出しあえば、パブリック・アクセス・テレビ活動もそれほど難しいことではなく、テレビを通して容易に発言することができる、と強く感じた。

## (2) サンタクルーズ・コミュニティ・テレビを拠点に

シニア市民とパブリック・アクセス・テレビの関係のもう一つのあり方として、個人としての主体的なかかわり方がある。自分の生き方やライフスタイルをしっかり確立しているシニア市民が、コミュニティの一員として、あるいは自分の生き方そのものの表現として、パブリック・アクセス・テレビにおける表現活動に参加している。なかでも、そのようなシニア市民と現場の統括責任者の熱意とががみ合っているのが、次に報告するサンタクルーズ・コミュニティ・テレビ (Santa Cruz Community Television=CTSCC) である。

サンタクルーズ市は、サンフランシスコから車で約2時間の太平洋岸沿いにある美しいリゾート地で、市内中心部にはカリフォルニア大学サンタクルーズ校がある。人口は約5万人、夏には大勢の人びとが休暇を過ごすために滞在する。サンタクルーズ・コミュニティ・テレビは、市内中心部のメイン・ストリートに面した建物で気軽に立ち寄れる場所にある。ここでは、シニア市民のドリー・スタインマン (Dorry Steinmann) さん、ケン・カーニー (Ken Kerney) さん、ボニー・トーマス (Bonnie Thomas) さんに話をうかがうことができた。

### ●個性的なシニア・プロデューサー



ドリー・スタインマンさんは、70歳代半ば。ショートヘアにパンツスーツがとても若々しい。彼女は、ご自身のレジュメと制作した作品を用意して私たちを出迎えた。ドリーさんは、ジャーナリストとしての長年の経験を生かして、現在は一人の市民としてパブリック・アクセス活動に関わっている。

ドリー・スタインマンさんの経歴は、まず1959年から1965年までのサクラメント（カリフォルニア州都）のCBSでのアンカー・パーソンからスタートする。当時、女性のアンカー・パーソンは彼女が第1号でありパイオニアであった。その後、番組制作に携わり、経歴を生かして1970年から1993年までは、ジュニア・カレッジでコミュニケーション・メディアの教授として、ジャーナリズムの歴史、広告、シナリオ制作のクラスなどを教えてきた。1993年にリタイアした彼女は、サンタクルーズ・コミュニティ・テレビが開局以来、関わっている。

パブリック・アクセス・テレビに参加する意義を尋ねたところ、ドリーさんは自分のこれまでの人生で学んできたことを引き続き生かすことができるし、若い人びとに学んできたことを伝え、手助けすることが義務であると感じていると答えていた。

### ● *Your Second Fifty Years*: あなたの第二の50年

ドリー・スタインマンさんは、*Your Second Fifty Years* (あなたの第二の50年) という週1回放送の番組を制作している。この番組のタイトルは、スタインマンさんが、50歳になった時に感じた違和感からアイデアを得て、命名したそう。まだまだ自分は若く、やるべきことがあるのに、「50歳」という言葉は、ものすごく年老いたように聞こえるという違和感だ。

彼女は、世界中を旅行することが趣味であるため、ビデオカメラを持っていき、現地でビデオに収め、編集をし、番組にしていると語っていた。

彼女の100回目の番組テープ *Your Second Fifty Years -Best of-* を分析すると、旅行だけを番組にしているのではなく、彼女が地域の専門家やシニア市民にインタビューを行い、それを編集し番組にしているものも多く見られる。テーマは、サンタクルーズ郡のシニア市民のイベント活動や、アルツハイマー症候群、高齢者への虐待などである。彼女の番組は、インタビュー、撮影、台本書き、編集などすべてを一人でこなすワン・ウーマン・ショーだ。大変な労力を必要とするため、時には再放送をするという。

その彼女を支えるものは何なのか。この100回記念のビデオでドリーさんは「最初は不安だったけどエグゼクティブ・ディレクターに励まされて続けることができた」と語り、エグゼクティブ・ディレクターが大きな役割を果たしていることがわかる。

### ● コミュニティへの奉仕



一緒に話をうかがったケン・カーニーさんは、70歳代で今も現役で写真スタジオを営んでいる。彼のイラスト入りの名刺には、イラストレーター／写真家と書かれていた。ケンさんは、コミュニティで行われるさまざまなイベントを取材して番組をつくっている。彼はそうした活動を「コミュニティへの奉仕」と考えている。

ボニー・トーマスさんも70歳代の女性で、黒で統一した服装はとても個性的だった。詩人でもある彼女は、4年前に自分が参加している詩の朗読会とかかわってボランティア活動をしたいと考え、サンタクルーズ・コミュニティ・センターでパブリック・アクセス・テレビの制作技術を習得する講習を受けた。そして、現在はライターズ・ユニオンと協力

してカリフォルニアの詩人の詩を朗読する番組を制作している。彼女もパブリック・アクセス活動を同じようにコミュニティへの参加として捉えている。

### ●アシスタント・ディレクター：シシ・ピネイロ

シニア市民の制作者との出会いの場を設定してくれたアシスタント・ディレクターのシシ・ピネイロ (Cece Pinheiro) さんは、長年、教育者として地元サンタクルーズで働いてきた。と同時に、サンタクルーズ・コミュニティ・テレビで市民として番組制作や理事の一人として運営に参加してきた。そして、2001 年秋に理事会のメンバーから現在のポジションに就任した。スタッフは 8 人。さらに 19 人のパートタイムスタッフがいる。インターンの受け入れにも積極的で、私たちが訪問した時にもカリフォルニア大学サンタクルーズ校の学生がインターンとして働いていた。



インターネットサイトには、サンタクルーズ・コミュニティ・テレビのポリシーがきめ細かく掲げられており、随所に「差別」や「ハラスメント」の禁止が明記されている。



シシ・ピネイロさんからの聞き取りによると、サンタクルーズ市は、カリフォルニア大学サンタクルーズ校ができてから人口が急増し、地価も高騰し、市内に住めない低所得者もでてきている。コミュニティにさまざまな問題が起こっているという。サンタクルーズ・コミュニティ・テレビは、コミュニティの抱える困難な課題を共に考える番組を独自に制作・放送することも多い。2001 年 9 月 11 日のニューヨークとワシントン D.C. における同時多発テロ事件の当日には、急遽、市長と数名の市民をスタジオに招き、「9.11 クライシスを考える」(*Santa Cruz Responds to the Crisis 9/11/01*) を放送している。

### (3) 街のマルチメディアな研究者：リチャード・リボウ

調査訪問で出会ったリチャード・リボウ (Richard Liebow) さんは、アクセス・サンフランシスコで週 1 回自分の番組を制作・放送しているシニア市民である。



彼は、催眠術に非常に関心があり、現役時代には印刷業を営む傍ら、催眠術研究の第一人者であるガージフ (Gurdjiff) の著書を研究してきた。彼が制作するのは研究と関わる、*Liebovian Perspective* (リボウの見方) というタイトルの番組である。

番組は、リボウさんが、自分一人で撮影、編集しており、タイトルや、番組最初のカウントダウン部分なども、手製の紙を壁に貼りつけ、それを撮影したものであったり、ビデオカメラのスイッチを切りにくる姿が映っていたりと、手作りの雰囲気漂う。ガージフの著書の一部を、リボウさんが説明し、彼の E メールアドレスと電話番号を伝えている。リボウさんは「君はパブリック・アクセスに才能がある」と友人に誘われてサンフランシスコ・シティ・ヴィジョン (現・アクセス・サンフランシ

スコ)の技術を習得するためのワークショップにご夫婦で参加し、パブリック・アクセス・テレビ活動をするようになった。

週に1回、「GURDJIEFF/OUSPENSKY GROUP WORK IN SAN FRANCISCO」と題して、コーヒーハウスに10数名で集まり、ガージフと催眠術に関するワークショップを行っている。ワークショップは市民たちが集う催眠術の勉強会で、参加は無料である。2002年3月25日現在、511回目のワークショップが継続されている。

これまでに、たまたま彼の番組を視聴したことで、コーヒーハウス・ミーティングに興味を持ち、参加した人が9名もいるという。また、年に1度、ガージフ研究のために、ワークショップ参加者と共にフランスで開催される国際研究会に行くという。

リボウさんは、きわめてマルチメディアな人間である。人とふれあってコーヒーハウスでのワークショップを行い、それと同じ内容で番組をつくる、そして、ワークショップが終わればすぐさま世界中の同好者にその記録をメールで発信している。これらの活動のすべてが彼自身の「生きている」ことそのものを表現しているだろう。

### 3. コミュニティとの相互作用

#### (1) ミッドペニンスラ・コミュニティ・メディア・センター

##### ●パブリック・アクセスを求めた長い歴史のあるコミュニティ

コミュニティとパブリック・アクセス・テレビ/コミュニティ・メディア・センターは非常に密接な関係を持つことが、今回の訪問調査で明らかになった。70年代からコミュニティがパブリック・アクセス・テレビを求めて歩んできたのが、ミッドペニンスラ・コミュニティ・メディア・センター (Midpeninsula Community Media Center) である。

このセンターは、アフリカ系住民の多いイースト・パロアルトとスタンフォード大学を中心とするリッチなウエスト・パロアルトのほぼ中間点にある。COOP 施設の一部を使用しており、インターネットサイトによるとスタッフは8人。場所柄か、スタンフォード大学の大学院生がスタッフとして参加している。

ここでは、アフリカ系シニア市民たちを中心とする *Senior Fireside Chat* の制作グループに会うことができた。C.W.ロディ (Ms. C. W. Roddy) さん、ルース・レイシー (Ruth Lacey) さん、バートルード・ウイルクス (BerTrude Wilks) さん、ネットィ・ロビンソン (Nettie Robinson) さんである。

エグゼクティブ・ディレクターの アニー・ニーハウス (Annie Niehaus) さんが、私たちの訪問調査を歓迎して挨拶に出てきて下さる。驚いたことに彼女は70年代にアクセス活動について相談するためにジョージ・コンクリンさんと出会っている。彼女自身も30年近くこの取り組みに参加しているということだろう。

アニーさんは、「高齢者は宝。彼らの経験や知恵をもらって生かすことが重要」とシニア市民の参加を非常に肯定的に捉えている。彼女自身も日頃、主流メディアが提示するシニア市民の否定的なイメージに問題を感じてきた。彼女は、50歳という以前は完全に最盛期を過ぎた人と考えられていたが現在はそうではないと語り、私たちがシニア市民に焦点をあてて調査にきたことに強い共感を示してくれた。



## ●シニア市民へ「通りを開く」: *Senior Fireside Chat*

聞き取り調査をした C.W. ロディさんたちが制作する番組 *Senior Fireside Chat* は、シニア市民に関するテーマを多く取り扱う、シニア市民による情報番組である。例えば、地域の新しい診療所のオープンのお知らせ、高齢者への虐待 (senior abuse)、ライフサイクルへの対応などの課題を取り扱っている。番組プロデューサーの C.W. ロディさんによると、通常のメディアでは存在しないシニア市民の声を幅広く聞かせ、シニア市民へ「通りを開く」 (open the avenue for senior people) ことを目指しているとのことだ。



番組は月 1 回の放送で、バートルード・ウィルクスさんが番組ホストを務め、毎回 3、4 人のゲストを迎えている。番組は、生放送で行なわれ、番組を見ている人が、電話をかけて、ゲストに質問することができるコール・イン・ショーという形式である。番組自体がオープン・フォーラムであると C.W. ロディさんは語っている。

制作は 9 人で行っているが、月 1 回の番組のために、ほとんど毎日のようにミーティングをし、リサーチすることを繰り返している。C.W. ロディさんは 10 年前にこのセンターのボランティア・スタッフとして参加し始めた。それ以前は、テレビを制作する知識も技術も何ももたなかったが、ボランティアの経験が素晴らしかったため、センターで講習を受け、技術を習得した。そして、この番組を 3 年前に始めた。

「テレビは、誰でも簡単に作ることができ、強い影響力をもつ。テレビは、若い世代とシニア市民とを繋ぐ橋になるべきだ」と、番組ホストのウィルクスさんは語っていた。

## (2) ペタルーマ・コミュニティ・アクセス・テレビ/メディア・センター

一方で、まだ歴史が浅く、これからコミュニティとの関係を築いていこうとしているのが、ペタルーマ・コミュニティ・アクセステレビ/メディア・センターである。

ペタルーマ市はサンフランシスコから北西に車で 1 時間ほどの郊外にある田園都市で、人口約 5 万 3000 人、サンフランシスコへ通勤する人も相当数いるという。市内から少し外れたところにある平屋の建物がペタルーマ・コミュニティ・アクセステレビ/メディア・センターである。エグゼクティブ・ディレクターの マーク・スモルヴィッツ (Marc Smolowitz) さんが、シニア市民であるビル・ハマーマン (Bill Hammerman) さん という教育学を専門とする元サンフランシスコ・シティ大学教授とともに出迎えてくれる。



センター内を案内されていくと、シニア・プロデューサーのフィリス・マタイ (Phyllis Matai, P.) さんが番組の編集をしているところに出会う。彼女はシナリオ・ライターとしてニューヨークで働いていた経歴があり、現在は引退してペタルーマに住んで牛や羊を

飼って暮らしている。彼女が制作するのは連続ドラマ (sitcom) でコミュニティに住む俳優たちがボランティアで出演するという。台本書き、撮影、編集をすべて彼女がこなしている。



このセンターは、マークさんを入れてスタッフ 4 人とこじんまりしている。理事会が財政面にすべて責任を持ってきているわけではなく、マークさん自身も財政面の仕事をしていると語っていた。

しかし、マークさんは私たちの訪問の機会を即座にとらえて、番組制作をしようと準備していた。スタジオで調査に訪れた鈴木とビルさんの対談をマークさんが司会する形式で番組の収録が始まった。

インタビューでは調査の目的と関わって、「なぜシニア市民なのか」という点やシニア市民とメディア社会とのかかわりでコミュニケーションの権利の重要性について話し合われた。

マークさん自身は、主流メディアでフリーランス制作者として働いてきた経歴を持つが、パブリック・アクセス・テレビの思想に共鳴して転職してきた。訪問調査の機会をとらえて即座に番組制作をするなど、物事の動きにとっても敏感なメディア人である。

#### 4. パブリック・アクセス・テレビ局／コミュニティ・メディア・センターに共通するもの

##### (1) 「ミッション・ステートメント」にみる理念

##### ●表現の広場／市民の参加によってコミュニティを形成する機能

今回訪問したパブリック・アクセス・テレビ局／コミュニティ・メディア・センターでは、クパティーノ・コミュニティ・テレビ (Cupertino Community Television) を除いて、そのインターネットサイトの最初のページに「ミッション・ステートメント」を掲げている。ミッション・ステートメントは、それぞれの局やメディア・センターがどのような考え方に基づいて運営しているか、何のためにパブリック・アクセス・テレビが存在するかを説明するものとして重要である。

各局のミッション・ステートメントの内容は、以下にみるように決して同じではない。しかし、基本的には、パブリック・アクセス・テレビが「表現の広場／市民の参加によるコミュニティ形成」の機能を果たすという理念を共有しているといえる。

##### ●バークレー・コミュニティ・メディア (Berkeley Community Media)

「私たちの使命は、民主主義の理念に基づき、市民の参加によるコミュニティの形成を促し、電子メディアにおける表現の自由の広場を設けることである」

*Mission: To build an electronic free speech forum in order to encourage democratic involvement and build community.*

●アクセス・サンフランシスコ (Access San Francisco)

「パブリック・アクセス・テレビやその他の電子メディアによって開かれたコミュニケーションを可能にし、コミュニティライフの構造を強化する。私たちの番組は、サンフランシスコのコミュニティやそこに住む人びとの多様性と関心事を反映する」

「パブリック・アクセス・テレビはあなたのビジョンを創造しあなたの声に耳を傾けさせる機会となる」

*Mission: To strengthen the fabric of community life by enabling open communication through public access television and other electronic media. Our programming reflects the diversity and interests of our San Francisco communities and residents.*

*Public access television is your opportunity to create your vision and get your voice heard.*

●ペタルーマ・コミュニティ・アクセス・テレビ／メディア・センター (Petaluma Community Access TV and Media Center)

「豊かなコミュニティのための中立的な広場を維持すること。この広場はコミュニティのすべての成員がメディア・デモクラシー、教育、リテラシー、エンパワーメントの進展に参加することを歓迎する」

「対話、市民の声、多様性、そしてコミュニティへの奉仕の精神を推進する番組によって21世紀におけるコミュニケーションの方法と情報交換へのアクセスと訓練を提供する」

「表現の自由をほめたたえ、とくにコミュニティの人びとによるテレビ、ラジオ、インターネット、その他の新しいメディアの利用に関して質を高め、最上の助言者となる」

*The mission of Petaluma Community Access, Inc:*

*- To maintain a neutral space for the community-at-large - one which welcomes all members of the community to participate in the evolving realm of media democracy, education, literacy & empowerment.*

*- To provide access & training to 21st century tools of communication & information exchange through programs that promote dialogue, public voice, diversity, & an ongoing spirit of community service.*

*- To celebrate freedom of expression, foster quality & mentor excellence, especially with regard to community use of television, radio, Internet & other forms of emerging media.*

●ミッドペニンスラ・コミュニティ・メディア・センター (Midpeninsula Community Media Center)

「MPACの使命は、市民による表現とコミュニケーションのためのコミュニティ・フォーラムとして電子メディアを最大限に利用可能にすることである」

*MISSION: The mission of MPAC is to make electronic media available as a community forum for the widest range of public expression and communication.*

●サンタクルーズ・コミュニティ・テレビ (Santa Cruz Community Television)

「私たちの使命は、テレビや他の電子メディアによってコミュニケーションを活性化し、サンタクルーズの街におけるコミュニティの精神を強化し、個人の生活を豊かにすることである」

*Mission Statement – It's what we are all about*

*The mission of Community Television of Santa Cruz County is to strengthen the spirit of community and enrich individual lives in Santa Cruz County by fostering communication through television and other electronic media.*

## (2) 多様性

今回の調査で訪問したパブリック・アクセス・テレビ局やメディア・センターに共通する特徴を一言で表現するならば、それは多様性である。

それぞれの局やメディア・センターは、80万人近い人口の大都市であるサンフランシスコ市に位置するものから、シリコンヴァレーの住宅街、ワインの産地を中心とする田園都市、太平洋岸に広がるリゾート地を中心とする大学町、など地理的条件も多様性に富んでいた。

また、それぞれの局やメディア・センターにおけるエグゼクティブ・ディレクターやアシスタント・ディレクターなど現場の統括責任者たちの多様性である。パブリック・アクセス・テレビ活動に長年かかわってきた人、局やメディア・センターの理事会メンバーから現場の統括責任者になった人、主流メディアから転職してきた人など、その背景は多様である。あわせてそれぞれの局やメディア・センターで活動している市民（彼らは一般にローカル・プロデューサーと呼ばれている）の背景や思想も実に多様で、そうした人びとによる多様な「表現」を尊重することこそが重要であると考えられている。

さらに、シニア市民たちがテレビという映像メディアの制作にたずさわるさまざまな形態である。それは、個人の主体的努力による番組制作、グループの協力による番組制作などさまざまである。

加えて、コミュニティとパブリック・アクセス局やメディア・センターとの関係性である。それぞれの局やセンターの歴史、コミュニティとの関係によって、施設のあり方も学校の一角、大学構内、あるいはコミュニティの一角で独立した建物を拠点にしているなど、実に多様性に富んでいる。以下では、このような観点から報告していきたい。

## 5. エグゼクティブ・ディレクターの果たす役割

ここではまず、調査訪問したパブリック・アクセス・テレビ局やメディア・センターのなかで、エグゼクティブ・ディレクターの果たしている役割が特徴的なサンタロサ・コミュニティ・メディア・センターとアクセス・サンフランシスコを取り上げる。

### (1) サンタロサ・コミュニティ・メディア・センター

#### ●田園都市に位置するセンター

サンタロサ市は、サンフランシスコから北西へ美しい溪谷や広大な牧草地を見ながら車



で約1時間あまり、ワインの産地としても知られている人口約15万人弱の田園都市である。市街地から少し離れた高校の一角にメディア・センターがある。大きなアンテナが目印だった。建物は平屋立てでドアを開けるとすぐ受付になっている。エグゼクティブ・ディレクターのローリー・シルヴェロさんが出迎えてくれる。

まず、彼女の案内で施設を見学させてもらう。入り口付近の壁には一面に番組制作をする市民の写真が何十枚も貼られている。写真からネイティブ・アメリカン、ヒスパニック系、アジア系など多様な人種やエスニシティの人びとが住む地域であることが分かる。設備は、撮影用のメインスタジオ、コントロールルーム、編集室などは他の局やメディア・センターとも共通しているが、ここにはアニメーション制作のため小さな人形や動物の模型が棚にずらっと並んでいる。建物の一角にはメディア・リテラシーコーナーもあって、関連したリーフレットを置いている。

さらに別の棟には2、3人のスタッフがいて、番組放送のためのコンピュータシステムを操作している。このセンターは、P（パブリック）E（教育）G（地方自治体）のためのチャンネルを運営している。驚いたことに、このメディア・センターはサンタロサ市の光ファイバーを管理する仕事も担っており、その分の収入もあるとローリーさんが語っていた。

このセンターは、市民が番組制作のための機材を自由に使用できるようになるためのいくつかのワークショップを定期的に開催している。市民は小額の会費を支払って、チャンネルの使用や番組の制作を行うことができる。

### ●スタッフを採用する権限を持つエグゼクティブ・ディレクター

施設の説明に続いて、ローリーさんにメディア・センターや自分自身の背景について聞いた。



センターは、1997年1月に運営を開始した。ローリーさんは、96年6月にエグゼクティブ・ディレクターに就任したが、それまではオハイオ州コロンバスにあるアクセス・センターのエグゼクティブ・ディレクターだった。このサンタロサ・コミュニティ・メディア・センターの理事会が開局にあたってコンサルティング・グループの協力を得て、ローリーさんをヘッドハンティングしたのだ。ローリーさんは、このセンターの理念や地域そのものに惹かれてオハイオ州から夫と2人の子どもと共に移住してきた。ちなみに夫は仕事を辞めて、自分自身は仕事がないこの地に来たという。ローリーさん自身はソーシャル・ワーカーや公共放送を経てアクセス・センターで仕事をしてきたが、コミュニティとつながって仕事することに強い関心を持っている。

理事会は市、短期大学、学校、図書館などコミュニティの運営に関わるセクターの代表を中心に構成されている。理事会は財政面に責任を持ち、ローリーさんはセンターの運営

に責任を持つ。そして、彼女自身が13人いるスタッフを採用する権限を与えられている。ローリーさんはスタッフを採用する基準として、担当する部局の専門性とその専門性がコミュニティとどのようにつながっているかを自覚する本人の情熱の2つを上げていた。すなわち、理事会がこのセンターのミッション・ステートメントを具体化する人物としてローリーさんを選び、彼女は理事会の要請を受けてその任務を実現するためのスタッフを選ぶわけである。したがって、エグゼクティブ・ディレクター個人の果たす役割は非常に大きいと考えられる。

スタッフには20代から60代のシニア市民も含まれている。給料はローリーさんを含めて決して高くはない。「なんとか生活できる給料」である。しかし、自分の専門性を生かしながらコミュニティの人びととつながることが職業として成り立っている。日本のようにテレビ制作にかかわろうとすると、放送局やプロダクションに就職する以外の道が考えられない状況とは大きく異なる。

### ●教育とセンターの協力

このセンターは、高校の校舎の一部を使用しているが、創設時から「教育とセンターの協力」というビジョンがあった。ローリーさんへのインタビューによると、エデュケーショナル・アクセス・サービスとして、歴史や国語の教師がセンターを使用しながら授業をしたりする。また、メディア・リテラシー教育にも力を入れており、生徒が制作した反タバコ・コマーシャルを見せてくれた。その背景には、メディア・センターを効果的に活用するためには、メディアについて学ぶメディア・リテラシーが必要であるという考え方がある。そのため、センターのワークショップでは、メディアが社会的な力であることをクリティカルに理解することを基本にしている。

### ●コミュニティのなかでパブリック・アクセス・テレビが果たす役割

ローリーさんにシニア市民が制作した番組はないかと尋ねると、引退したジャーナリストでありコミュニティの歴史愛好家でもあるゲーラ・ベランさんがコミュニティの歴史を語る“*Voice of Sonoma Country*”の一部を見せてくれた。彼女はこれまで20シリーズもの番組を制作しているという。番組にはコミュニティと関連したものが多い。というのもこの市には800ものさまざまな活動をするNPOが存在していて、それらのNPOがセンターを活用している。ローリーさんと一緒に調査に応じてくれたスティーブさんもシニア市民だが、コミュニティのNPOとセンターを結び付ける役割を果たしている。

ローリーさんは対話のなかで「テレビは決して私たちのコミュニティについて語ろうとはしない」「商業メディアのなかで、ノン・コマーシャルのパブリック・グリーン・スペースを維持することが必要」と語っていた。そこにパブリック・アクセス活動の意義を認めているといえるだろう。さらに、ローリーさんは、パブリック・アクセス活動がコミュニティをボトムアップする役割を果たしていると述べ、グローバリゼーションの波の中でこそローカルなリソースを保ち、コミュニティをエンパワーし、コミュニティを成熟させる必要があると情熱を込めて語っていた。

## (2) アクセス・サンフランシスコ

## ●多様なローカル・プロデューサー

今回の訪問調査を通して、エグゼクティブ・ディレクターの個性や情熱が局やメディア・センターの運営に大きく関係することを学んだ。熱心な統括責任者がいるところは、スタッフ全体にその影響を及ぼしているように感じた。平等性を基本とした受付の応対や雰囲気、番組制作をする市民の写真、WAVE賞<sup>5</sup>などの賞状など内部のレイアウトや飾り付けひとつをとっても、市民を積極的に迎え入れ、その活動を肯定的に評価するメッセージを発しているように感じたからだ。



個性的なエグゼクティブ・ディレクターは、サンタロサ以外の調査訪問先にも見られたが、その一人はアクセス・サンフランシスコ (Access San Francisco) でエグゼクティブ・ディレクターを務めるゼイン・ブレインー (Zane Blaney) さんである。

アクセス・サンフランシスコは、さまざまな NPO が活動する人口約 80 万人のサンフランシスコ市内にある。それは、ダウンタウンのメイン・ストリートに面し、市役所の近くにある斬新なデザインの新築建造物である。場所柄、入り口には鍵がかかっておりインターホンで受付のスタッフを呼び出して出入りするようになっている。しかし、受付やスタッフルームは通りに面してガラス張りであり、開放的な印象である。

チャンネル数は P (市民)、E (教育)、G (地方自治体)、各 2 局ずつである。スタッフは 11 名で女性やネイティブ・アメリカン、アジア系など多様な人びとを雇用している。NPO としての経営は理事会、評議会が担当しており、評議会には、各領域から著名な人びとや組織がボランティアで参加している。ローカル・プロデューサーは約 200 人ですべての人種、年齢、文化、非営利組織、社会変革を求める組織とともに自己中心的 (me-ism) なタイプの人びとなど非常に多様な人びとが参加している。

## ●ラジオ・プロデューサーからエグゼクティブ・ディレクターへ

ゼインさんは、ワイオミングの高校生時代からラジオに関わっていた。彼の声によかったため地元のラジオから誘われたのだ。大学卒業後もラジオで働き、そのうちにラジオ・ジャーナリストとして作品を制作する。カリフォルニアに移ってきて独立ラジオ・ジャーナリストとして 3 世代の日系人をテーマにした作品を制作したりした。1988 年に理事会に加わり、1991 年にエグゼクティブ・ディレクターに就任する。

彼はインタビューの中で、さまざまな「思想」の存在を認める表現の自由 (free speech) の重要性について、たとえナショナリストやネオ・ナチであってもその存在を認めるということだった。多様性をそこまで徹底するのは、“voice” が存在することが重要ということだろうか。パブリック・アクセス・テレビの今後に関しては、その全国組織である「コミュニティ・メディア同盟」(Alliance of Community Media = ACM) が首都ワシントンに事務所を置き、国レベルで規律／規制 (regulation) をめぐるロビー活動を続けている。彼はそれを「民主主義と表現の自由の問題」であると語っていた。

<sup>5</sup> パブリック・アクセス・テレビ／コミュニティ・メディア・センターの全国組織である Alliance for Community Media が毎年審査して優秀な作品を表彰する賞。審査は部門ごとに行われており、シニア部門もある。

ローリーさんやゼインさんに共通するのは、パブリック・アクセス・テレビ活動を民主主義の課題であると明確に捉えていることである。さらに、パブリック・アクセス・テレビが制度として確立されているから安全だという認識は露ほどもなく、常に CATV 会社というメディア企業や政府とのせめぎ合いの中にあると考えていることだ。

## 6. おわりに

最後に、今回の訪問調査を通して学んだことや日本においてパブリック・アクセス・テレビ活動を進めるための課題について、以上で述べたことと重なる部分もあるが、今の時点で考えられることをまとめておきたい。なお、今回の調査は制度としてのパブリック・アクセス・テレビについて調べることを目的とするものではなかった。したがって、本報告でも、その点に関する言及は最小限にとどめている。制度面の研究は今後の課題として残されている。

訪問調査を通して学んだことは、第1に、それぞれの局やメディア・センターにおけるエグゼクティブ・ディレクターやアシスタント・ディレクターなど現場の統括責任者たちが果たしている重要な役割や理念の明確さである。制度やシステムを活性化する要素はあくまでも「人間」であるということである。聞き取り調査に応じてくれたエグゼクティブ・ディレクター／アシスタント・ディレクターは、商業メディアがコミュニティの主張について語ってくれるという幻想をまったく持っていなかった。だからこそ、アメリカ建国以来の伝統である草の根の民主主義を守るために、メディア社会の今日ではメディアとのかかわりぬきに市民の発言は考えられないということをはっきりと認識し、自分たちの活動の意味を位置づけているのだろう。

第2に、制度的な保障があり、機材が自由に使えるといったハード面に加えて、パブリック・アクセス・テレビ活動を可能にするさまざまな条件をシニア市民たちが自ら備えていることを、訪問調査を通して強く感じた。

日本社会では、テレビ番組は非常に身近であるにも関わらず、番組制作や放送は市民からは隔たった存在として一般に認識されている。しかし、今回聞き取りをさせていただいたシニア市民たちは、パブリック・アクセス・テレビ活動を何ら特別なことと捉えていない。彼らは局やメディア・センターの提供するワークショップに参加して講習を受け、ごく自然にテレビ番組を制作するようになっている。むしろ、シニア市民自身が、番組の企画や取材、調査などについて、人生経験も豊かでさまざまな技能を持っているため、何の問題もないと考えているように見受けられた。





さらに、訪問調査のなかで出会ったエグゼクティブ・ディレクターやアシスタント・ディレクターは、シニア市民の存在をコミュニティの「宝」として捉える感覚を持っていて、シニア市民がパブリック・アクセス・テレビ活動に参加することを積極的に奨励している。すなわち、局やメディア・センターとシニア市民が互いをエンパワーする関係性があると考えられる。

第3に、メディア・リテラシーとパブリック・アクセス・テレビ活動との関係である。

まず、訪問調査したサンタロサ・コミュニティ・メディア・センター、アクセス・サンフランシスコなどは、インターネットサイトでもメディア・リテラシーの重要性を明確に示している。このことは、エグゼクティブ・ディレクターへの聞き取り調査でも確認できた。また、そうした認識は、他の局やメディア・センターのエグゼクティブ・ディレクターにも共通している。メディアとは何かを知らずして、番組を制作することができないという共通認識が存在すると言えるのではないだろうか。

第4に、日本においてパブリック・アクセス・テレビ活動を進める上で何が欠けているのか、という課題についてである。

近年、地方自治体の生涯学習センターや女性センターから立命館大学鈴木研究室にメディア・リテラシー講座の企画と運営への協力依頼が数多く寄せられている。そのような市民講座には、シニア市民が多く参加している。参加しているシニア市民の中には、豊かな人生経験や培ったキャリアを感じさせる人びとも多い。「クパティーン・シニア・プロダクション」のカール・マッキャンさんのような男性も参加している。パブリック・アクセス・テレビ活動を行うことが潜在的に可能なシニア市民は、日本にも確かに存在すると考えられる。

しかし、日本の現状では、あまりにも多くの要素が欠けている。何よりもまず、シニア市民が自分の持っている「ちから」を生かして能動的にパブリック・アクセス・テレビ活動に参加することが可能であるという情報そのものを手にすることが、一般には、不可能である。

さらに、メディアが遍在している今日の社会において、メディアとのかかわりぬきに現在の社会を認識し、市民として社会的に発言していくことは困難であるということ、すなわち民主主義社会を維持していくことが困難であるという問題意識の欠落を指摘したい。そのような問題意識の欠落に拍車をかけるのが、「言論・表現の自由」はメディアの権利であり、あたかも彼らの“特権”であるかのように主張するメディア自身である。したがって私たちとしては、パブリック・アクセス・テレビ活動の基本である市民の言論・表現の自由と権利を改めて認識することが重要だと考えられる。